夏――祭り

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏――祭り

【Ｎコード】
Ｎ８５９５Ｔ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
夏のある夜、大きな音に誘われてベランダにでた私。

※サイト、ｄノベ転載

低く響く大きな音が聞こえて、私はもしや、と思い、ベランダに出た。

夏とはいえ、夜は冷えていた。海の側で海風が吹くから、なおさらだった。
ランニングに短パン、そしてつっかけでは少し寒かった。
だが、それよりも確かめたいことがあったから、私はベランダの先に出た。
すると、案の定、港に近い辺りが明るく賑わっていた。

そうか、今日は祭りだった。

私は、次にまたその大きな音の元が見えるのを待って、肌寒いのもかまわず、そのままベランダにいた。
すると、空気を切る音が聞こえ、オレンジの火花が夜空に大きく咲いた。
次が上がるまでには少し間がある。
私は急いで部屋の中に戻り、冷蔵庫からビールを一本出した。
そして、ベランダに戻り、折りたたみ椅子を出して、花火が見える位置に腰掛けた。

ちょうど座った時に、花火はまた上がった。
私は、さっきまで少し寒かったのを忘れて花火を見ていた。
お供は、もちろんこの手にあるビール。
私は、花火を見つつ、手にあるビールを開け、ぐいっと飲んだ。
寒かったが、ビールはこの冷たさが喉を通る瞬間が心地良い。
そうして私は、終わりの合図があがるまで、花火を見ていた。

終わって、部屋の中に戻る。
また先ほどと同じように部屋でテレビを見ていて、ふと、足がかゆいな、と思った。
何気なく足を触れようとして、私はふと思い至った。
そして、手を伸ばした先を見てみる。
そこは、見事に赤くはれていた。

やられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8595t/

夏――祭り

2011年6月7日04時29分発行